

自然と文明

—人間は何処から来て、何処へ行くのか—



講師:竹村 真一 氏(京都造形芸術大学教授/Earth Literacy Program 代表)

地球規模で自然環境を見つめると、壮大な自然の循環システムが存在することが判明しつつある。地球時代の新たな「人間学」を提起し、世界初のデジタル地球儀「Tangible Earth(触れる地球)」を製作した竹村真一氏が語った。

災いと恵みは表裏一体 真の地球リテラシーとは？

私たちは、生涯のうちに世界中を踏破し得る時代を生き、食料や水は世界中から調達できるシステムが出来上がっている。まさに地球を歩き、食べ、地球を消費しているのだ。それをもってグローバル化の時代と呼ぶわけだが、では、子どもたちは何を以て地球を学んでいるか。織田信長が見たのと同じ、メルカトル図法の平面地図である。グローバルに考えねばならないと言いつつ、グローバルに考えるための環境・ツールが備わっていない。いわば情報環境の欠陥である。

私はそうした認識から、触れるデジタル地球儀、「Tangible Earth」を製作した。この上に雲の動き等のデータを落とし込むことで、リアルタイムに地球の姿を把握できる。例えば台風・大雨の到来を察知し、未然に被害軽減策を講じることができる。また、地震発生源のデータを落とし込めば、いかに日本列島に地震が集中しているかがよく分かる。

自然災害に対して、多くの人はネガティブな印象を持っている。しかし自然環境において、災いと恵みは表裏一体である。例えば、昔「死の湖」と呼ばれた洞爺湖は、有珠山の噴火により大量のミネラルが降り注ぎ、今では魚の住む風光明媚な土地となっている。

現に、1986年に噴火した三原山の周辺住民は、噴火を「御神火」と呼び敬っている。古来より日本人が自然に対してそうした感覚を持っていたことが、古事記の記述などからもうかがえる。台風にしても、深層部にある豊富な養分と、海面近くの生物層を攪拌するミキサーの役割を担っている。

災害そのものが怖いのではない。災害を軽んじているわれわれの社会がリスクを増大させているとの認識が必要なのだ。沿岸低地に人口・資産が集中してしまった現代日本は災害に対する脆弱性を抱えている。「3.11」を経た今、リスク管理のあり方と、地球の富と経済を接続した「地球経済」という観点での環境リテラシーを、今一度考え直すべき時に来ている。

地球を創造する存在としての 自己認識が求められている

科学技術の発展により、「宇宙船地球号」がいかに機能的なメカニズムを有しているかが判明しつつあるが、その事実がきちんと伝えられていない。もちろん都合の良い真実ばかりでなく、人間が作り出した不都合な真実もある。「触れる地球儀」を見ることによって温暖化や各国による環境汚染が、地球規模で深刻な影響を及ぼすことが理解できる。生きた地球をリアルタイムで見ることによって、地球の未来を予測できるの

だ。われわれは、地球をグローバルに考えマネジメントできる時代にいることをあらためて認識すべきだ。

われわれ日本人は、Co-Creatorとして地球環境を住みやすい環境に組み替えてきた歴史を有している。例えば日本の川は急流であるため、すぐに水が流れ去ってしまう。洪水と渇水を繰り返すため、人間にとっても生物にとっても住みにくい環境であった。これを江戸時代の日本人は、河川工事や灌漑技術により、水を水田にため込む流れに組み替えていった。環境を破壊するだけでなく環境を創造する存在として、人間は存在しているのである。

そうした観点で、現代のわれわれに何ができ得るのか。例えば、電力使用のピークタイムは地球の自転とともに移動する。そこで、世界を送電網でつなぎ、時間と共に電力を融通し合う「グローバル・エネルギー・システム」という構想がある。夢物語ではなく実現可能な具体策として、推進されている。

人類が地球を意識し、そこに生きる存在として自身を意識する、自己認識の時代を迎えている。私が「触れる地球儀」を製作したのも地球の「見える化」にこそ狙いがあり、できれば世界中の小学生がこれに触れ、地球に思いをはせてほしいと考えている。技術と意識のギャップを克服した先にこそ、真のグローバル化があるのだ。